高崎経済大学論集　第44巻　第４号　2002　169頁～172頁

平成 13 年度第 2 回特別講演会（講演抄録）

アフリカから現代世界をみる

講師　松　田　素　二
（京都大学大学院助教授）

African History Reconsidered : Toward a New World History

Motoji MATSUDA

1　世界史の外部としてのアフリカ

アフリカ大陸は、日本の 80 倍以上の広さをもつ広大な大陸だ。そこには現在、 50 以上の国々が成立している。ところがこの広大な大陸で展開してきた歴史については、これまでの世界史のなかでは、あまりとりあげられることがなかった。

人類誕生という 100 万年前の歴史を除けば、アフリカが世界史のなかで語られるのは、奴隷貿易、植民地支配、そして飢餓・内戦・内乱という（アフリカにとって）否定的な歴史でしかなかった。中国やインド、あるいはヨーロッパやイスラーム世界で語られる歴史は、文明の盛衰の歴史であったり、他地域と双方向で交流する政治史や経済史であったりする。なぜ、アフリカ史だけが否定的で一方的に規定される存在とされてきたのだろうか。

その答えは、アフリカ史に対して向けられてきた一つの強力な眼差しにある。その眼差しによって、アフリカは「歴史なき大陸」「暗黒の大陸」として捉えられてきた。たしかにアフリカ社会は文字をコミュニケーションの手段として発展させてこなかった。そのため、このような無文字社会には、過去を記録し事実を確定する手段がないので「歴史がない」と決めつけられてきたのだ。さらに「アフリカ社会は数千年にわたって原始時代と同様の自給自足経済によって営まれてきた」とか、「そこには進歩や発展は生じようがないために、歴史は存在しない」という見方までまことしやかに主張されてきた。

アフリカ史と向かい合うとき、まずやらねばならない作業は、この否定的な眼差しとの格闘である。この視線は、アフリカが、世界のほかの地域と同じように、自身の地域社会内部に歴史を展開させる力をもっていることを否定する。アフリカは未熟な社会として、つねに外部の進んだ文明か

らの教えと介入なしには歴史が展開しないというのである。さらにこの視線は、アフリカが他地域と双方向で交流する力を持っていることを否定する。これらのアフリカに対する否定的な眼差しは、いつどこで成立したのだろうか。この否定的眼差しを乗り越えないかぎり、アフリカから世界史を逆に見ることも不可能なのである。

2　なぜアフリカ史は貶められたのかー奴隷貿易の衝撃

14 世紀から 15 世紀前半は、サハラ以南のいわゆるブラックアフリカにおいて、各地で経済的繁栄と文化的洗練を経験した、いわばアフリカ文明における花の時代であった。王国を訪問したりその地の噂を聞いたりした、ヨーロッパやイスラーム世界からの旅人は、こぞってアフリカ文明を賞賛した。

ところがこのアフリカ史の栄光の時代は、 16 世紀には突如ピリオドが打たれてしまう。豊かなアフリカ社会は、世界史の外に追いやられ、「暗黒の大陸」にさせられてしまったのである。その最大の原因は、 15、16 世紀からはじまった、ヨーロッパの大膨張運動にある。

この大膨張時代のあいだ、アフリカは単一の商品の原産地でありつづけた。その商品とは人間だった。この時代、アフリカ大陸から大量の奴隷が、新大陸やヨーロッパへと狩り出されていった。たとえば18世紀のイングランドの社会においても、黒人奴隷の姿は日常の光景であった。奴隷は公然と競りにかけられ売られたし、上流社会の女性が黒人少年を「飼う」ことも珍しいことではなかったのである。

奴隷交易が「発展」した 400 年という時代は、ヨーロッパ主導による世界システムが形成された時代であり、その出現は、多くの劇的な変化を世界にもたらした。封建制から市民社会への発展、商業資本主義から産業資本主義への展開、神学的心性から科学的精神への変化。こうした一連の変化は、一言で言えば、近代市民社会への「進歩」と言うことができるだろう。自由と民主主義という政治形態、市場メカニズムを核とする経済システムといった、今日の私たちの社会にも通じる理念と制度は、この世界システムの形成のなかで誕生し確立されたものだ。このシステムの誕生とアフリカの奴隷化は、じつは密接に関わりあっていた。すなわち市民社会の発展（世界史の進歩）とアフリカの奴隷化（アフリカ史の否定）は、同じ歴史的歩みの表と裏を構成してきたといってもよいのである。

3　ヨーロッパの光（市民社会）とアフリカの影（奴隷化）

大航海時代の幕開けによって、世界は徐々に単一の経済システムとして姿をあらわしはじめた。アフリカ人の奴隷を中核商品とする三角貿易によって、ヨーロッパは巨大な富を手にし、世界システムの支配者としての座につくことになった。こうした富を背景にして、文化、学術のみならず政

治、経済の分野においても、ヨーロッパは急激な社会革新を押し進めていった。市民革命や産業革命を通して、現代世界の雛形となる社会が、西ヨーロッパに出現したのである。この新しく出現した近代市民社会の理念は、自由であり平等であり友愛であった。18 世紀末のフランス革命は、この理念を現実化しようとする市民たちの社会革命であった。

ところで、ヨーロッパにおける近代市民社会の誕生と暗黒アフリカの発明が同じ精神の産物であったと言われると、腑におちないことが出てくる。それは、近代市民社会の基本原理である自由、平等、友愛という精神と、人を奴隷化し売買するという行為とは、そもそも両立しないのではないかという疑問である。しかし 18 世紀から 19 世紀にかけてのヨーロッパでは、一方で人間の本源的自由と民主主義をとき、他方では奴隷制を積極的に推進したのである。彼らはいったいどのようにして、この相対立する命題を両立させたのだろうか。

その答えは簡単だ。もしもアフリカ人は自分たちと同じ人間ではないという命題が「科学的」「実証的」に成立すれば、彼らを動物のように扱う行為は正当化されることになると、ヨーロッパ人は考えた。人権や民主主義は、人間に対してのみ適用可能なものだからだ。事実、この時代のヨーロッパでは、アフリカ人を人間ではないとする、大量で多様な言説が、哲学や思想そして生物学の名によって産み出されたのだった。

4　アフリカ史を通してみえてくる世界

私たちが現在暮らしている市民社会のルーツは、ヨーロッパに成立した近代社会にある。そこにおいて、自由平等といった人間観や、生物学や哲学といった近代科学、あるいは民主主義や人権概念といった制度・価値がつくりだされ、現代に伝えられてきた。しかしその人間観や近代科学、諸制度を創り出した同じ精神が、アフリカを落とし込める思想と実践をも産み出してきたことがわかった。ヨーロッパは、アフリカの奴隷化によって近代市民社会の基盤をつくりあげることに成功した。そして、それを正当化するために、アフリカ人を劣等な人間として非人間化し、アフリカ社会を歴史なき暗黒大陸として世界史の外部に排除する理屈を、科学の名のもとに完成させていった。これが、アフリカが突然、世界史の舞台から見えなくさせられた原因だった。ヨーロッパ主導の世界史をつくりあげるために、アフリカ蔑視の思想（人種差別史観）とアフリカ史の否定（暗黒大陸史観）が必要とされたのである。

したがって、アフリカ史を学ぶことは、こうしたヨーロッパ近代がつくりだした一つの世界史観を乗り越えて、もう一つの世界史の可能性を明らかにすることでもある。それは、特定地域の歴史を排除する世界史ではない、各地域の自律的歴史展開力に目を向けた、多中心的世界史になるだろう。この意味で、グローバル時代の世界史にとって、アフリカ史は重要な役割を担っているのである。

平成 13 年 12 月 3 日　於　附属図書館ホール

高崎経済大学経済学会 平成１３年度・第２回特別講演会
アフリカから世界史を見直す
講師
京都大学大学院助教授
松田　素二氏